

平成

事業

形式

社会教育



平成23年度「十七字のふれあい事業」

今年度で10回目となった『十七字のふれあい事業』

● 馬鈴薯を手に持つ孫の誇らしげ (渡部美代子)
● ばあちゃんと植えたジャガイモ百倍に

(福島市立清明小学校六年
渡部明日香)

祖母と孫

● オレの部屋関係者以外立入禁止
(棚倉町立棚倉中学校 一年)

陣野 遥登

子と母

● 塩むすびにぎり続けた手が赤い
(相馬市立向陽中学校 三年)

荒 章太郎

子と父

● 久々に肩もみ券を使う母
(いわき市立植田中学校 三年)

藤森 夕歌

子と母

● たくさんさんの支援に誓う恩返し (中島 和枝)
● 災害で無くした物と得た心
(福島県立磐城校が丘高等学校 三年)

中島 悟

母と子

最優秀賞
作品

CONTENTS

特集	2
「震災後の復旧・復興に向けての地域の絆」 「避難所支援の実践」	
提言	4
「学力の基盤となる『子どもの生きる力』を 育成する社会教育の役割」 福島大学人間発達文化学類教授 浜島京子	
輝け社会教育	5
西郷村中央公民館 須賀川市立第一小学校父母と教師の会	

学校図書館ボランティアの会(下郷町)
福島県立磐城学校平分校放課後子ども教室(いわき市)

人 こえ かも ころ	7
元須賀川市婦人会会長	横田 フサ子
福島県立博物館主任学芸員	小林 めぐみ
NHK杯全国中学生放送コンテスト福島県実行委員長	吉川 貞司
AIZU塾塾長	小柴 忠雄

平成23年度社会教育関係各種受賞者	
平成24年度福島県社会教育施設行事予定	8



3. 11の午後2時46分、相馬市中央公民館の事務室も大きな揺れに襲われました。棚やロッカーがたおれ、エアダクトが天井からぶらさがり、講座の打合せをしていた職員は、その異常事態に外に避難せざるを得ませんでした。それから数時間後、中央公民館に隣接しているスポーツアリーナそうまは、原釜や尾浜などから避難してきた多くの市民であふれかえり、それ以後、4月初旬まで公民館職員は泊まり込んで、その対応に追われたのです。

この東日本大震災により、相馬市では行方不明者を含む死者459名、津波による家屋等の流出が1,000棟を超えるなど、人的にも物的にも甚大な被害を受けました。

震災後約3か月間は、4,000名を超える市民が避難所生活を余儀なくされ、中央公民館は支援物資の保管場所及びボランティアの宿泊所として使用されました。そして公民館職員は8月の業務再開まで、避難所のお世話や支援物資の受け入れなど、公民館とは全く別の業務に就いていました。

8月、中央公民館業務が再開。年度当初に計画していた事業は計画通りにはできず、市民参加の講座については講座数を減らさずに、実施回数を減らして行うことになりました。

また、応急仮設住宅に生活されている市民に対して、生きがいつくりや心身のリフレッシュ及び応急仮設住宅入居者のコミュニティづくりに寄与するために、9月からは3名の社会教育指導員が中心となり、集会所などで行う生涯学習講座を立ち上げました。

気軽に、和やかな雰囲気で開催できる活動や講座の運営につとめ、ふれあいを通して、特に単身入居者の孤立化を防ぎ、入居者同士の一層のつながりが深まっていくよう支援していきたいと考えています。

応急仮設住宅入居者と社会教育指導員のかかわり

応急仮設住宅

(大野台・北飯淵・刈敷田・柚木の4カ所 設置戸数1,500戸、入居者数3,848人)

相馬市
教育委員会

社会教育
指導員

組長

(集会所の統治システムとして、
一つの集会所ごとに組長を選出)

戸長

(1棟(5戸)ごとに
1名の戸長を選出)

講座開設までの流れ

- ステップ1 社会教育指導員と組長の打合せ
- ステップ2 応急仮設住宅入居者への学習意識調査の実施ととりまとめ
- ステップ3 講座の企画・立案と講師の派遣依頼

活動講座メニュー

- ミニ自然探勝(バラ園散策、芋煮会、登山)・ウォーキング&仮設住宅地域内文化財巡り
- ガーデニング講座・かご編み・健康体操・編み物・カラオケ・絵手紙・陶芸



◀ ガーデニング講座



◀ ウォーキング

開設効果

- 仮設住宅に住むまでは知らなかった者同士が講座に参加することにより、コミュニケーションが図られ、新たなコミュニティ構築のきっかけづくりができています。
- 狭い仮設住宅にいると気が滅入るが、講座に参加することによりストレスを発散させることができています。
- 2月下旬には作品展を中央公民館で実施した。自作の作品を展示されることにより作品作りの励みにもつながっている。

避難所支援の実践

●児童図書研究グループ「トトロ」の取組み【二本松市】

子どもの読書は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かにするなど「生きる力」を育むものといわれている。トトロは27年間この言葉を胸に、多くの子どもたちに"読書の喜び"を味わってほしいという目的で、図書館や学校で読み聞かせの活動に取り組んでいる。昨年は避難所として急設された市内の体育館で活動を行った。

震災後の原発事故により避難を余儀なくされた多くの浪江町の方々は、二本松市に避難されていた。すでに立ち上がっていた災害ボランティアセンターから「避難所にいる子どもたちに読み聞かせを」との依頼があり、6人の会員が活動に参加した。しかし、こうした状況のもとで子どもたちへの接し方や会場づくりの問題、そして準備する出し物など会員には様々な戸惑いがあった。けれども選んだ出し物の紙芝居や大型絵本は楽しい内容のものばかりであり、場所をとらないようにと工夫した手遊びやハンカチシアターなどもあった。また、おはなし会の始まりにいつも歌っている「さんぽ」の歌詞を、模造紙2枚に大きく書き写し用意をした会員もいて活動への意気込みが感じられ、避難所での活動に対しての不安や迷いは半減した。

さて、こうしておはなし会は始まった。支援物資に囲まれた畳三畳が当日の会場である。

♪あるこう あるこう わたしはげんき・・・♪「さんぽ」の歌声で、友達と遊んでいた子どもたちも集まってきて元気な歌声がひろがった。また、出し物の大型絵本『きょだいな きょだいな』では、調子の良い「あったとさ あったとさ・・・」という、繰り返しの言葉がでてくると読み手と一緒に大きな声をだしていた。さらに、紙芝居の出し物では、ユーモアいっぱいのおかしな話が終わると、布団にくるまって



▲笑顔で手遊びを

見ていたおじいちゃんやおばあちゃんは笑顔で拍手をしてくれた。それとは対照的に避難所の片隅で遠巻きに様子を見ていた数人の子どもたちがいることに気づいてはいたが、参加した子どもたちの明るい笑顔を見て、避難所にきて良かったという会員一同の感想であった。

この活動を通して、ふたつのことを再認識した。ひとつは"おはなしの持つ言葉の力"である。楽しいおはなしの数々は、避難所生活という大変な状況にある子どもらの笑顔や元気を取り戻し、それが心のケアに役立つのではないだろうかと思えることができた。

ふたつ目は"人とのかわりの大切さ"である。初対面であっても一人一人に寄り添うことで思いは通じる



▲大型絵本を熱心に聞く子どもたち

と考えていたが、短い活動時間の中ではすべての子どもたちとコミュニケーションをとることは難しかった。こうした活動を継続することで、より多くの子どもたちとかわりを持ち、楽しい時間を共有することができるのではないかと思った。

さらに、これらを踏まえて避難所の活動は、子どもの笑顔をつくり、その笑顔が大人たちの心の復興となり、地域の復興につながる日がくると希望をもつことができた。

学力の基盤となる 「子どもの生きる力」を育成する 社会教育の役割



福島大学人間発達文化学類教授
浜島 京子

平成12(2000)年からOECD(経済協力開発機構)による学習到達度調査が3年ごとに行われている。いわゆるPISA調査とよばれている国際調査であるが、15歳(高1生)を対象に、「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」をみる問題が出されている。これまでに4回の調査が行われてきたが、日本の結果において第2回目(平成15、2003年)、第3回目(平成18、2006年)と多くの内容で点数・順位ともに低下する現象が見られた。文部科学省はこの点を憂いたと思われるが、平成20(2008)年改訂の学習指導要領では、前回(平成10年)、一律2割削減した教科の年間時数を、一部の教科(体育を含む)については平成元年版学習指導要領の時数に戻すあるいは近づける等の改訂を行った。また、平成19(2007)年度からは全国学力・学習状況調査(小6・中3対象)を実施するようになり、学力調査では、知識・技能を中心としたA問題と、実生活での活用力や問題解決力等をみるB問題が設定された。学習状況調査においては、(1)学習に対する関心・意欲・態度、(2)学習時間等、(3)学校生活等、(4)基本的な生活習慣、(5)家庭でのコミュニケーション、(6)社会に対する興味・関心、(7)自尊意識、(8)規範意識等、(9)幼児教育経験など、生活関連の調査が行われるようになった。このように、我が国ではPISA調査の影響を受け、学力調査の新たな取り組みが始められたといえよう。調査の結果は国立教育政策研究所のH.P.に掲載されているが、例えば平成21(2009)年度の場合、・朝食を毎日食べる児童生徒の方が正答率が高い傾向がみられる。・家の人と学校での出来事について話をしている児童生徒の方が正答率が高い傾向がみられる。・携帯電話の使い方について、家の人との約束を守っている児童生徒の方が正答率が高い傾向がみられる。などが報告されており、家庭生活や家族の関わりと学力の関連性の高いことも示唆されている。

一方、福島県においても、それぞれの分析結果の特徴と課題、今後の各学校における取り組み例などが県教育委員会H.P.に掲載されている。そこでは、学校だけの取り組みではなく、家庭・地域、関係機関、小・中学校との連携の必要性について記されている。

ところで、我が国のPISA調査結果の下降現象について上述したが、この時の高1生が過ごしてきた時代には、子ども達の実態にどのような特徴が見られていたのでは

ろうか。そこで、いくつかの調査資料を調べたところ、例えば平成20年版青少年白書に記された「問題行動」では、およそ平成7年から19年あたりまで不良行為少年の総数が増加傾向にあり、なかでも平成12年以降は深夜徘徊の増加率が高くなるという特徴が表れていた。この時期は、上記の高1生が小学校高学年から中学生の時期に相当する。また、同時期に、子ども(7歳・9歳)の立ち幅とびが大きく低下する現象も見られていた。(文部科学省「2006年度体力・運動能力調査」)。さらに、国民1人1年当たりの品目別消費量の推移において、野菜・米の消費量が減少し、畜産物及び油脂類が増加している時期とも符合していた(農林水産省「食料需給表」)。これらより、学力の低下の背景には、子どもの食生活を含む生活の乱れ、体力の低下など様々な心身の崩れが大きく関わっていたことが推測される。すなわち、今後の子どもの育成において、まずは子どもの生活の建て直しが重要であることが認識されよう。文科省による新しい全国学力・学習状況調査の実施はその点も意図されていたものと考えられるが、それらが単なる実態把握の調査に終わらないことが肝要だ。そのためにも、子ども達の健全な発達を実際的に支援する社会教育の役割が重要となる。かつて(平成8年)、第15期中央教育審議会は、これからの子ども達に必要なのは生きる力であり、問題解決力、豊かな人間性、健康・体力の育成が大切であることを提言した。これらをふまえつつ、子ども達が、人、自然、物、事などと豊かに関わりながら自己を成長させ、人生を切り開いていく力を育てるための具体的な取り組みが社会教育に求められている。

プロフィール はまじま きょうこ

1978年 東京学芸大学大学院教育学研究科家政教育専攻
現 在 福島大学人間発達文化学類教授
福島大学附属幼稚園長

● 福島県社会教育委員の会議議長、(社)日本家政学会東北・北海道支部長及び理事、小学校家庭科教科書編集委員を歴任。

主な著書として、渡邊彩子監修、新しい家庭5・6(東京書籍株式会社)、小学校家庭科教育研究(学芸図書K.K)などがあり、家庭科教育や社会教育など、多方面で活躍。

夢と誇りにあふれた魅力ある 公民館事業を目指して

西郷村中央公民館

那須連峰の裾野に広がる西郷村、川は山に生まれ大地を潤し、四季の美しさを彩り多くの生命を育てています。今回、中央公民館が平成11年以来2度目の優良公民館表彰を受賞し、これまで以上に地域の生涯学習の拠点として、公民館が果たす役割に期待が高まっています。

公民館活動の基軸を「地域にこだわり、地域から発想する」に据え、事業内容や方法等に工夫を凝らしています。特色ある事業として、住民の学ぶ意欲や楽しさを実感するように、公民館教室・講座等に単位制を導入し「大学等」の卒業を認定する「西郷単位制総合大学」を開設しています。

また、企業誘致等で新住民が増加している地域の特性から、地域の誇り、愛着心、郷土愛を育むため、村のシンボルスポーツのウォーキングと関連させた「ふるさと講座」を実施しています。

以下、西郷単位制総合大学について紹介します。社会の急激な変化の中で多様化する学習ニーズにどう応えていくか問われています。それには、ニーズの把握とすべての住民の学習機会を考慮し、要求課題と現代的・地域課題とのバ



▲大学必修講座教養・コミュニケーション

ランスを勘案した魅力ある教室・講座の開設が必要です。そこで、教室・講座やサークル活動等に単位制を導入し、履修単位により「大学等」の卒業を認定する「西郷単位制総合大学」を開設し、教養・健康・夢などの生活満足度の向上を図っています。



▲大学必修講座「歴史・現地学習」

履修科目は生命・人権・環境等の現代的・地域的内容を主とする大学主催講座の必修科目と既存の教室・講座等の選択科目から成り、卒業要件単位を定めています。学生自ら楽しく学べるように講義のみでなく、演習や現地学習など学習方法も工夫しています。効果的な事業実施のため、外部関係機関の長を委員とする検討委員会で助言と指導を得ながら改善を図っています。次年度、大学卒業生が誕生しますが、卒業生の地域社会に還元する手立てを今後考えていきたいと思っています。

地域に守られ、地域づくりの拠点に

須賀川市立第一小学校父母と教師の会

3月11日のあの瞬間、校舎の壁は崩れ、校庭は隣接する池側に大きく崩落した中、全児童が無事怪我もなく避難できました。その後、卒業式や学びの場の確保の準備に奔走してくださった先生方に深く感謝いたします。そして、校長先生と前PTA会長との密な連携のもと緊急時における迅速な判断が行えたことや、これらの判断を援助してくださった関係諸機関に併せて感謝申し上げます。

平成23年度はすべてが通常と違う状態で学校教育活動が始まりました。隣接校の須賀川二小と須賀川一中へ上・下学年に分かれて間借りして授業を再開しました。入学式は、須賀川二小の各教室に分かれて、PTA総会は文書開催で行い、4月末には新体制で各委員会が始動しました。原発事故による放射線対策として、校庭での活動の制限を行ったり、運動会、創立140周年事業の延期をしたりするなど変則づくめの中で1学期が過ぎました。

夏休み中には仮校舎ができ、2学期スタートから全校児童、572名が共に学べることとなりました。2学期に運動会、音楽会を実施し、3学期には140周年事業としての「地球のステージ」を公演すると同時に、記念に相應しい「応援歌」を制作しています。

また、子どもたちの活躍も光り、練習場がない中で、全国大



▲「読み聞かせ」の様子

会賞獲得を果たしたマーチングバンド部をはじめ各特設部でも保護者が協力し合って活動を支える中、頑張りました。

今回の事態の中で、「安全」の重要性を再確認しました。二手に分かれて通学した1学期、仮設校舎へ移転した2学期において、それぞれの通学路での新たな危険箇所を改善するため、地域、警察との協議や、自主的な街頭見守りを推進し、事故なく過ごせました。放射能対策では2校PTA合同で開催した医師の講演会や情報交換、仮設校舎の放射線低減化奉仕作業、市P連が主体となって行った、行政機関への要望活動などを通して、安全確保に努めてきました。

今後の課題は、過去10年来小中合同で開催している「一小・一中子どもを守る会」の組織強化です。育成会、町内会、警察署などが情報交換し、課題を話し合う会ですが、今回の震災を契機に、より活性化を図っていくことが必要だと実感しました。各組織とも、年度で役員も変わる大所帯の組織の為、緊急を要する事態に迅速に幅広く対応することが困難でした。より機動性を高めることのできる、連携が図れるような新たな組織変革を進めることが必要だと痛感しています。そして、我々PTAが会員同士がより一層気がねなく子育てを相談できる組織になると同時に、学校が地域づくりの拠点となれるよう、努力していきたいと思っています。



▲「除染作業」の様子



読書の好きな子どもがさら増えることを願って

学校図書館ボランティアの会(下郷町)

学校図書館ボランティアの会は、町内の小中学生が読書活動を通して想像力と感性を養い、いつでも読書に親しむことができることを目的に、平成14年より活動しております。

町内にある小学校3校と中学校1校で、それぞれのボランティア会員が年間十数回の活動を行っています。朝の時間や昼休み時間を利用しての読み聞かせや語り部を中心に、図書の整理や修繕、季節ごとにブックスペース壁面の飾り絵を制作したり等、様々な活動を行っています。

朝の15分間の読み聞かせでは、子どもたちは皆静かに真剣に聞いてくれます。毎回そんな子どもたちの真剣な眼差しと笑顔に出会えるのを楽しみに、学校の先生と連携を図りながら図書の選定にあたっております。読み聞かせの後には、児童が感想を発表してくれますが、その観察力や自由な創造力に驚かされます。紹介した本が「難しかったかな?」と感じるときもありますが、図書担当の先生から、「その時にすべて理解できなくても、少したって、あの時図書ボランティアの方が読



▲図書室での読み聞かせの様子

んでくれた本だ、と思い出して、改めて内容を理解しながら読んでいる姿を見ると、子どもたちの成長を感じますよ。」と言っていた、うれしく感じました。また、学校から「戦争体験を聞く会」の講師を依頼され、そこで聞いた話を国語の学習や文化祭での発表に生かすことができたとの意見もいただいております。

私は結成当時から携わっておりますが、心に残っていることを一つあげてみます。宮沢賢治の本を読んであげた日、読み聞かせが終わった後で、ある先生は「今日読んでいただいた本他にも宮沢賢治の本は沢山ありますよ。」と言って図書館から5〜6冊持ってきて教室に置いたそうです。子どもたちはそれらを借りて読んだことと思います。この時私は良い先生がいるなあと思いました。これこそが教育であり、本を好きになるきっかけとなったのではないのでしょうか?ボランティアをやっていて良かったと思いました。

読書の好きな子どもがさら増えることを願って、これからも後継者を探しながらもう少しがんばろうかと思っております。



▲教室での読み聞かせの様子

子どもたちに心の原風景を

福島県立聾学校平分校 放課後子ども教室(いわき市)

聾学校平分校は、常磐線草野駅から北へ約1kmほどのところにある聴覚に障がいのある子どものための学校です。

放課後子ども教室には、平分校の11人の子どもたちが登録し、金曜日を除く平日(年間101回予定)に行われています。

私たちスタッフが大切にしているコンセプトがあります。

それは、学校で一生懸命勉強した後の放課後のひとときを楽しく過ごす場とすること。また、特技を持った地域の人たちの協力の下、子ども教室に来たからこそ出会うことのできる体験活動を取り入れることです。

昨年度は、けん玉や陶芸、おもちゃづくり、折り紙など、また今年度は、お米を持ち寄ってお菓子を作る「バクダン」を体験することができました。子どもたちにとってこのような本物に触れる体験は、これからの人生にとってかけがえのない宝物になるのではないかと講師となっていた地域の方々から感謝しております。

さて、子ども教室が始まって3年が過ぎようとしていますが、私たちスタッフと子どもたちとの出会いと活動は決して平坦な道のりではありませんでした。

まず何より初めの頃は、コミュニケーションがうまく取



▲できあがった「バクダン」おいしう

れませんでした。また、子ども同士のトラブルをどのように収めればよいのか、信頼関係を築きつつ、しつけもきちんとするためにはどのような関わりをすればよいのか等々難問山積のスタートでした。

そのような課題に対して、平分校の先生方にアドバイスをいただきながら、また、全員での話し合いや研修会を重ねながらここまでやることのできたというところです。

子ども教室の活動が、子どもたちが大人になった時に、ふっとよみがえる「心の原風景」になればうれしいと願いつつ、たくさんの笑顔に囲まれながら活動に取り組んでいきます。



▲けん玉全日本チャンピオンの技に見とれました。



社会教育功労者表彰を受賞して

元須賀川市婦人会会長
横田 フサ子

28年間勤めた教員を退職後、昭和52年から須賀川市教育委員会社会教育指導員として6年間勤務いたしました。この間、各公民館において講座を担当させていただき、地域の方々との交流を通して、自分自身が多くのことを学ぶことができました。また、当時は市民活動が盛んに行われていましたが、事務局を教育委員会に置いている団体も多く、勉強会などを行い自立の手助けをして参りました。

また、平成元年から8年間須賀川市婦人会連絡協議会会長を務め、子どもの祭典、環境美化づくり運動、国体での各選手へのお昼の準備など会員の皆様に支えられながら、様々な活動に取り組んで参りました。特に平成5年の兵庫県宝塚市との女性交流団では、須賀川で薬種商を営んでいた伊藤祐倫が摂津（現在の宝塚市）から取り寄せて栽培した牡丹が、230年ぶりに里帰りする感動の瞬間に立ち会うことができたことは今でも鮮明に覚えています。

今後も、微力ながら女性の社会活動の向上に貢献できるよう頑張りたいと思います。



社会教育功労者表彰を受賞して

福島県立博物館主任学芸員
小林 めぐみ

福島県立博物館に学芸員として採用されたのは1996年のこと。言葉にあらざる声で歴史を雄弁に物語る資料に向き合い、その声を翻訳者のように伝えることは、現在も変わらず学芸員冥利に尽きる仕事です。

それに加え、地域における博物館の役割を再検討する中で歴史と文化を守り伝える文化施設として、地域とどのように関わることができるか、博物館に何ができるのかを模索しながら、他団体や大学等との連携事業も企画運営してきました。

この度、思いがけず平成23年度の社会教育功労者表彰を賜りましたのはそのような学芸員としての仕事にこれまで携わるに当たり、お力添えご指導くださったみなさまのお陰と心より感謝いたしております。

東日本大震災、原子力発電所事故により、福島県にとってますます文化の必要性は高まっています。地域の歴史・文化を継承し、再認識していくことは、私たちが福島県への誇りを再び取り戻すことに繋がるはずです。福島県立博物館に職を頂いている学芸員として、果たせる役割をこれからも一つ一つ形にしていきたいと考えています。



校内放送活動を通して

NHK杯全国中学生放送コンテスト福島県実行委員長
吉川 貞司

浦和（さいたま市）に生まれ育って、共通語で話す私が、最初に赴任した方言豊かな福島県只見村で、私の共通語を聞いた生徒らの羨望的となってしまった。それから間もなく私は教頭先生から、共通語を校内放送で聞かせてくれないか言われ、喜んで引き受けたことが、私の放送活動の始まりである。

赴任した学校は10校だが、指導する毎に私は放送活動にのめりこむようになり、お陰で各種の放送コンテストには何回ぐらい入賞したことか。

この放送活動で一番悩んだのは校内ニュースである。生徒に取材・執筆という暇はない。それで私は退職後、1年間の学校ニュースをサンプルとして書き、管内の中学校に配布した。

過年、日本視聴覚教育協会からこの活動が認められて表彰状を戴いたのを機に、各学校での当時の指導を懐かしく思い出しながら、その顛末を後期高齢となった今、暇つぶしに書いてみようかなと思っている。



中・高校生の社会活動

AIZU塾 塾長
小柴 忠雄

中・高校生の社会活動参加を「アソビ」と捉える親たちが多い事には驚きを隠せない。

「進学・就職を見据えた学習力向上」と「心身を鍛える部活動」の2点、つまり、人生で最も多感な年代を「学校と学習塾」という狭い世界に閉じ込める傾向が強いと感じるのは私だけなのでしょうか。中・高校生が社会活動に参加することにより、社会や地域が若い人に「何をもめているのか」がわかるのです。一步一步努力し、自分の頭で発想し、自分の口で発音し、自分の身体で実行する大切さを。家族と友と地域の絆の大切さを。このためには、地域が持っている「地域教育力」を結集し、その地域にあった「地域活動リーダー養成・養成機関」が不可欠になると思うのです。小学生対象の機関は多々あるのですが、本当に必要なのは中・高校生を対象にした機関なのです。このことから、昨年会津において、中学生の地域活動リーダー養成を目的とした「AIZU塾」を、各方面関係者・団体のご支援とご協力により開塾し、今後人材育成に務める所存です。

平成23年度社会教育関係各種受賞者 平成24年度福島県社会教育施設行事予定

表彰区分	被表彰者氏名・被表彰団体名	受賞月日	表彰者
社会教育功労者	横田フサ子（元須賀川市婦人会会長） 菊池れい子（元矢祭町社会教育委員） 小林めぐみ（福島県立博物館主任学芸員）	11月18日	文部科学大臣
優良公民館	西郷村中央公民館 福島市信陵学習センター	11月18日	
優良PTA	須賀川市立第一小学校父母と教師の会 棚倉町立山岡小学校PTA 福島県立あぶくま養護学校PTA	11月22日	
子どもの読書活動優秀実践図書館・団体(者)	1 図書館 須賀川市図書館（須賀川市） 2 団体 学校図書館ボランティアの会（下郷町）	10月29日	福島県教育委員会
社会教育功労者	塚本 繁（元福島市生涯学習を進める市民会議議長） 山崎 信子（喜多方市社会教育委員の会議議長）	11月1日	
功績顕著な団体・施設	1 団体 福田小学校父母と教師の会 西郷村熊倉婦人会 伊南小学校学而遊育成会 東尾岐やってみんベエ一会 2 施設 郡山市立小原田地域公民館 須賀川市長沼公民館 喜多方市慶徳公民館	11月1日	(社)日本PTA 全国協議会長
日本PTA全国協議会	1 団体 二本松市立油井小学校父母と教師の会 いわき市立桶売小・中学校保護者と教職員の会 2 個人 佐藤 厚潮（前副会長） 渡辺さゆり（母親代表理事） 渡部 英明（監 事） 勝見 州良（研修部長）	11月18日	
視聴覚教育功労者 （各地功労者）	吉川 貞司（NHK杯全国中学生放送コンテスト福島県実行委員長）	10月14日	(財)日本視聴覚 教育協会

福島県立図書館	福島県立美術館	福島県立博物館	福島県自然の家
「福島県立図書館 再発見！」 （再開館日～7/4） 「軍記物語にみる"戦"の記録～佐藤文庫収蔵資料を中心に～(仮称)」 (7/6～10/3) 「新聞で見る福島(仮称)」 (10/5～12/5) 「ふくふくネット、文化6館連携事業(検討中)」 (12/7～3/6) 「わくわく科学～科学よみものクロナクル～(仮称)」 (3/8～6/5)	「五味太郎作品展 絵本の時間」 4月14日(土)～5月20日(日) 「ベン・シャーン展」(仮称) 6月3日(日)～7月16日(月・祝) 「ルーヴル美術館展」(仮称) 7月28日(土)～9月17日(月・祝) 「田淵俊夫展」(仮称) 10月6日(土)～11月25日(日)	冬の企画展 「小さなもの集まれ！ －雑道具から古民家模型まで－」 2月18日(土)～5月13日(日) 夏の企画展 「恐竜時代のふくしま」 7月14日(土)～9月17日(月・祝) 秋の企画展 「会津の寺宝」 10月6日(土)～11月25日(日)	郡山自然の家オープンデー 10月14日(日) 会津自然の家あったか ふれあいまつり 10月21日(日) いわき海浜自然の家 秋のオープンデー 10月28日(日)

福島県社会教育委員

※ 任期：平成22年6月20日～平成24年6月19日

伊藤 行和 小椋 詳子 小熊 敬子 小林 清美 佐藤壮一郎 佐藤 晴美 瀬田 弘子
 新井田萬壽子 根上 正志 根本 早苗 根本 佳夫 浜島 京子 古川満里子 柳沼 陽一
 吉田 恵三 渡辺 仁
 (副議長) (議長) ※50音順

編集後記

3.11、忘れたくても忘れることができない大震災から早1年が過ぎようとしております。この1年、県内各地で、「復旧」「復興」にむけて、人々の力を結集して取り組んできました。震災前のようにほどこ遠いかもかもしれませんが、着実に一步一步ずつ、前に進んでいることは間違いないと思います。改めて、人間の強さや地域の絆の大切さを感じました。

今号のテーマは、「震災からの「復旧」「復興」に向けて」でした。各地での取組を紹介しております。ぜひ、手にとってごらんいただきたいと思います。

平成24年3月16日発行
社会教育 No.332

編集 社会教育課
 発行 福島市杉妻町 2-16
 福島県教育委員会
 印刷 福島市西中央 4-25
 (株)吾妻印刷